

ナイアガラタイムス

2023年4月15日 第13号

人 力 夢



目次

- 名盤探隊⑫ 井上陽水『ハンサムボーイ』（1990年9月発売） ……2
- シネマ滝⑩ 『Life～天国で君に逢えたら～』（2007年8月公開） ……3
- THE 極み 『シェアスペース CHIBISIRO』オーナー太一さん ……4
- 美味しい話⑩ 眞田珈琲 ……7

名盤探検⑫ 井上陽水「ハンサムボーイ」（1990年9月発売）

井上陽水「少年時代」彼の最大のヒット曲でもあり、今や唱歌のように学校などで歌われている。この曲は90年発売の「ハンサムボーイ」に収録されている。フォーク黄金時代を牽引してきた彼の軌跡と、そのアルバムを紹介したい。

福岡で歯医者の子として生まれた井上陽水（あさみ）は、家業を継ぐために九州歯科大学を受験するが失敗してしまう。そんな時に深夜放送からザ・フォーク・クルセダーズの「帰ってきたヨッパライ」が流れてきた。高校時代にテープレコーダーを早回しをするという手法で遊んでいた彼は「これなら自分にも出来るかもしれない」とギターを独学で始める。

ラジオ番組に自宅で録音したテープを持ちこんだ。それを聞いたディレクターは興奮し、リスナーからも人気があった。そして69年に上京しデビュー。アンドレカンドレというアーティスト名で3枚のシングルを発売するのだが芽が出る事はなかった。

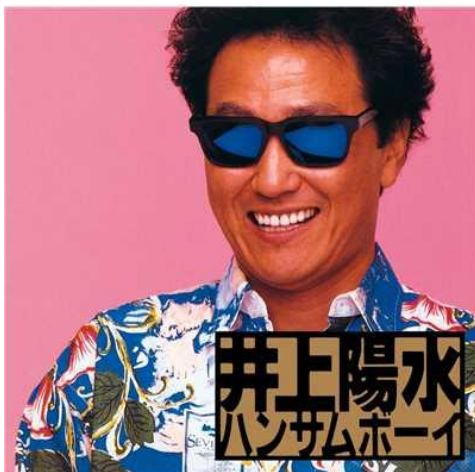
そして72年アーティスト名を井上陽水に改め「人生が二度あれば」で再デビュー。ここから彼のサクセスストーリーが始まる。翌年の春に発売されたシングル「夢の中へ」。これはきっと、さがし物をしている時に口ずさんだ事がある方も多いかも。同年12月に発売のサードアルバム「氷の世界」がミリオンヒットを記録。

80年代に入り彼のバックバンドだった安全地帯がデビュー。そして中森明菜などに楽曲提供をした作品を集めたセルフカバーアルバム「9.5カラット」が155万枚のヒット。

滝も、この頃になって彼の曲を聞くようになった。透明なのにどこか影がある声と独特で深い詩の世界には圧倒されてしまう。

さて「ハンサムボーイ」の話をしてしまおう。オープニングを飾るのは、ささやきのような歌声で始まる「PIPOPA」一気にアルバムの世界に引き込まれてしまう。滝が好きなのは、彼の友人である築地哲也の「news23」に楽曲提供した「最後のニュース」語りかけるように地球上の問題を歌い、♪あなたにグッナイ♪と歌い締めていくこの曲、胸がしめつけられる。「TOKYO」も東京の夜景がバーッと浮かんでくるような曲で好きだ。そして「少年時代」。あまりにも文学的な歌詞が心地よい。

この一枚、ゆったりできる。改めて聞いてみるのもいいかもしれない。



シネマ滝⑪『Life～天国で君に逢えたら～』（2007年8月公開）

この作品は、日本でただ一人のプロウインドサーファー飯島夏樹さんの物語である。

夏樹（大沢たかお）と寛子（伊藤美咲）は、大会に出場するために一年中世界をまわっていた。メジャーではないウインドサーフィンは賞金も少なく、遠征費なども自腹。夏樹はなかなかレースにも勝てず、二人はいつも貧乏生活。もちろん結婚式も挙げられず、食事も質素で家賃の取り立てに来られたり、電気が止められたり。それでも二人とも夢はあきらめなかった。

そんな時、ハワイで行われたワールドカップでついに優勝。結婚式を挙げ、4人の子供にも恵まれ、大きな家も買って、幸せの絶頂期だ。それから夏樹は家族とすれ違いながらも世界中の大会に出場し快進撃を続けていった。けれど、幸せな時間は長くは続かなかった。夏樹は病に倒れてしまうのだ。

検査すると、ソフトボール程の腫瘍が見つかった。それは、とても珍しい肝臓のガンだった。「オレ鍛えていたのに、健康優良児だったのに」と夏樹はつぶやいていた。

日本に戻り大手術をし成功するのだが、その後も一年間で17回の入退院と2回の大手術をする事になる。そして医師から余命宣告される。夏樹はパニック障害になり、しばらく子供と話しをすることもなく、引きこもり生活が続いた。だが寛子が見守る中そこから抜け出す事ができた。

夏樹は寛子に「俺、後どれぐらいなんだ」と聞き「今度の冬は越せないみたい」と言われ「それじゃあ冬がないハワイに行くか」と延命治療はせず家族でハワイで暮らす事にした。

ハワイのさわやかな風の中で、子供達に自分の大きくなっていくガンをさわらせながら「俺、コイツに沢山なものをもらったんだ」としみじみ語っていた。そんな穏やかな時間が流れていった。そして日本のファン達に向けて「今日もガンに生かされています」というブログを綴っていた。これが好評になり出版されるという手紙がきた時、夏樹は旅立っていた。

この映画を劇場で見た時なんて映像がきれいなんだろうと思った。ウインドサーフィンの迫力、ハワイの青い海、ハイビスカス。そして夏樹の人柄。最期に書いた寛子への手紙は胸が熱くなる。

ぜひ、一度見て頂きたい。



『～THE極み～シェアスペース「CHEBISHIRO」オーナー太一さん』

矢部の大通りを少し入ったところに喫茶店のような建物がある。入り口には「本日の一期一会あります」と書かれている。そこがシェアスペース「CHIBISHIRO」だ。俺もそこにいるだけで、すごく落ち着ける空間だ。今回はそのオーナー太一さんに取材させて頂いた。



彼の話をしていると、本当にいろんな思いをして、今に至っているのだとしみじみ感じた。皆さんにも彼のこれまでのことを知ってもらいたいと思いました。

【本音を閉じ込めてしまう子供だった】

僕は小さい頃から「ああしたい、こうしたい」という気持ちが自分の中にはあったんだけど、引っ込めてしまう事が多かった。母親に「こうしたら」と言われるとそうしてしまう。劣等感のかたまりだった。みんなの遊びにもついていかれずに、体も小さかったし自分だけがいつも遅れているような感覚だった。小学校の低学年に相模原に引っ越して来た。けれど、その理由は教えてもらえなかった(これが自分の中ではかなり影響が大きかった)。その頃、周りの同級生に好かれようと必死だった。自分のキャラを作ったり、今思えば本音を閉じ込めてしまうような事があったのだと思う。

【サッカーを始める】

中学校に上がって、部活を自分で選べるようになったので、サッカーを始める。けれど周りの子達は小学校からやっているのになかなかついていけなくて無理をした。それで高校に上がった頃、膝を壊してしまった。リハビリに2年かかった(今も完治はしていない)。ケガもいっぱいして入院して、クラスメイトともうまうまいなくなり、イジメというか仲間はずれにされるようになった。それもあって高校は途中から行かれなくなり、自分の中で自主卒業という形にした。

家の中でもふさぎ込んでいた。頭も自分でバリカンで丸坊主にし眉毛まで剃って人相を変えて、自分の存在を消したいとまで思っていた。

【音楽と出会う】

そんな中で音楽と出会った。なにも希望がなかったが、JポップやJロックチャートを賑わせていた曲が耳に入ってきた時、いつもだったら、そんなに自分の中に入ってこない言葉がスーッと入ってくる感覚があった。その時に何故か一人じゃないという思いになって、周りに自分と同じように悩んでいる人達がいっぱいいるんだ、こ



こでふさぎ込んでいる場合じゃない音楽を届ける側に立ちたい、発信する側に立ちたいと思った。それまで家に引き込もっていたが、これではいけないとアルバイトを始め少しずつ社会へと戻っていった。

ハタチ過ぎに自分でギターを買った。大体の人は音楽を始める時カバーから入ると思うが、僕の場合は、いきなり自分で曲をつくり始めた。言いたい事がいっぱいあったから。ギターのコードも全然覚えてなかったが、変な使命感みたいなものがあったら路上に出て歌うようになった。そしてバンドを組みたいと思い、貼り紙をしてメンバーを集めバンド活動を始めた。そうしているうちにスカウトして下さった方がいて、音楽事務所に所属しメディアにも少し出るようになった。

でもその活動の中で違和感を感じていた。それは、商業的な音楽ビジネスというところにおいてしまうと自分のやりたい事が出来なかった。伝えたい言葉で歌いたかったが、それだと受け入れてもらえなかった。売っていかないといけない世界だったから。

【CHIBISHIRO をつくる】

生歌で生ギターで直接届けられる場所が欲しくて CHIBISHIRO を作った。せっかく作るのであれば自分だけの場所ではなく、いろんな人がいろんな事を実現できる場所にしたいと思った。音楽に特化する場所ではなく。たとえば誰かが一人ではできないと思う事があっても、僕と話してみても「だったら、こうしてみたらいいんじゃないの」「こうしたら出来るかもしれないよ」と。そんな希望がある場所にしたいと思っている。

【今の活動のこと】

優しい人達が集まっている。幼少期からのいろんな傷や思いがあって、大人になってからそれを癒し活かそうとしていると感じる。絵や写真の作品展を開いたり、ライブをやったり。僕が歌や楽器を教えるレッスンの場としても使っている。子供向けのお菓子教室を開いたり、占いの館だったり、本当に色々やってきた。皆さん、それぞれ人が集う場をつくろうとしている感じだ。そういう人達が集まった時にコラボという形で進めていくと、新たなものも生まれてくるので、それがいいなと思っている。

【CHIBISHIRO の名前の由来】

朝起きた時、ふと何故か急に出てきた言葉だった。CHIBISHIRO って、小さい頃に保育園で「チビクロサンボ」の主役になったことはあるけど、それと関係があるのかは分からない。僕は曲を作っている時も同じで、起きた瞬間に浮かんだりすることがある。CHIBISHIRO って自分の中で考えていくと、ひらがなカタカナもローマ字の大文字小文字のロゴとしてかわいいし、意味も後付けになるんだけど、そのまま「子供の城」とも捉えられるし、キャンバスをイメージしていたり「チビ」というのは子供の事だけではなく自分も背が高い方でもないし、そんなに広い場所でもないし何より「チビ」という言葉を肯定したいと思って。あとは「のびしろ」にもかけている。



【これからの事】

今までと変わらず出会った人達の思いを聞いて続けていきたい。矢部のサグラダファミリアじゃないけれど、ずっと作って、変化して、進化し続けていく場所でありたいなと思っている。ママさん達のウクレレ教室というのものもあるんだけど、みんなの発表の場としても作っていきたい。

乗り越え方を教えられる大人をいっぱい増やしていきたい。ぼくは子供達はできると思っている。でも、いろんな事ができなかった大人が「それはできないよ」と言ってしまう事が結構多い。それよりも「君のやりたい事は、もしかしたら、こうやればできるかもしれないよ」と言える素敵な大人達を増やしていきたいと思っている。

毎月1日にぼくの弾き語りワンマンライブをやっているが、それはずっと続けていきたい。聞いてくれる人がゼロになったらやめようと思いつつやっている。聞きに来てくれる人がいるから続けられているなと思っている。

パーカッションもやっているのでもう少し音楽の幅も広げていきたい。舞台の設営、音響とか照明などを駆使して面白いエンターテイメントをつくっていきたい。

やりたい事がどんどん増える。あんなにやらない理由ばかりだったのに、今は続けたい理由が増える一方だ。



美味しい話⑩ 『真田珈琲』

だいぶ前から気になっていたお店がある。それは千代田にある「真田珈琲」だ。

毎日のように近くを通過していた。時折、カラフルなのぼりとお洒落な外観が気になっていて、いつか行ってみたいなと思っていた。

「今度の美味しい話、どこにしようか」と事業所の人達に聞いてみたら「真田珈琲がいい」との意見があり、即決。先日お店に行ってみた。

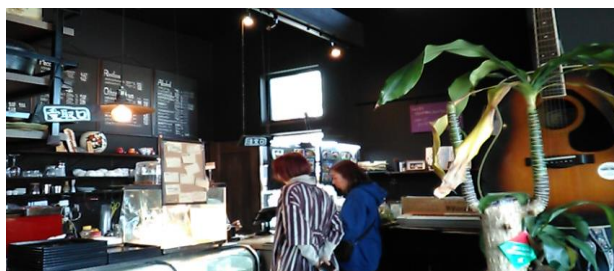
さっぱりしていて気さくなオーナーの裕美さんは、こんな話をしてくれた。コーヒーが好きでバリスタになりコーヒーマシーンを自宅に置いた。ただ家で自分が飲むためにマシーンをを使いコーヒーを入れると、一杯のコーヒーを入れるために40分もかかり、掃除も大変。けれど街中のコーヒーショップの味はおいしいとは思えなかったので自分が持っている技術を活かしたいと思い10年前にキッチンカーを始め、4年前に店を出した。もともと食べる事が好きだった裕美さんは、コーヒーに合うちょっとしたケーキとピザなどの食事を出す事にした。ピザ専用の窯で500度まで上げられるので、トーストもパンケーキもカリッと焼けるそうだ。

店の中ではレゲエが流れ、ゆったりとした時間が流れていた。奥には座敷童があり、若いお母さんが子供達を連れてきて、コミュニティーの場として地域になじんでいるようだ。帰りがけにはラグビー選手も来て裕美さんの人柄で様々な人達が集まってきているようだ。

俺が食べたのは釜焼きパンケーキ。分厚いスポンジにメイプルシロップがかかっているおいしかった。

看板メニューのピザは後日テイクアウトし、みんなで食べた。「生地がモチモチしてて、おいしい」という声があちらこちらから聞こえてきて好評で素敵なランチタイムだった。

メニューは、ほかにも色々ある。また、行きたい。



編集後記

野球に疎い滝でも、今回のWBCには何故かワクワクさせられた。あれだけの実力がある選手ばかりそろえたら勝つだろうという予感はずかしくも感じていた。ヌートバー選手の日本への愛情、巻き起こったペッパーミルブーム。大谷が自分の看板に当てたホームラン。メキシコ戦での9回ウラの2ベース、そして村上が二塁打を打ち劇的な逆転。アメリカ戦でドラウドを抑えて世界一へ。予感をはるかに超えるものだった。海の向こうで活躍している大谷選手、今回の大会で身近に感じられたように思えて改めて彼のすごさを感じた。

市役所通りの桜も咲き誇り、なんだか今年の春は胸がたかなる。

今回の編集にとりかかるまで時間がかかった。ひとつのコラムを書くのに1カ月半もかかって、本当に作れるのかと思う時もあった。けれど本誌を製作する時に会える人の魅力に触られる事、おいしいお店を探す事が楽しくて、きっとこれからも色々なことがあっても続けていこうなと思っています。

今回の「極み」に登場してくれた太一さんの CHIBISHIRO。行くたびにいろんな人に会える場、思いがけない縁があったりする場、そしてそこに集う人達がそれぞれの気持ちを形にしていく。それがシェアスペース CHIBISHIRO です。太一さん、貴重な経験を語って頂き本当にありがとうございました。これからも滝の落ち着いた場として、あり続けて下さい。応援しています。

これから春本番になり、色々な花が咲き誇ります。思い損春を満喫しましょう。

それでは・・・

発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

感想などのメールはこちらまでお願いします

振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 ○九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491

読んでみて『面白い』と思ったら振り込みをお願いします。

これはメンバーの工賃になります。

